

# シネマ通信

第15号 (2024年12月8日)



## 海の沈黙

第15回鑑賞作品

原作・脚本：倉本聰

監督：若松節郎

出演：津山竜次／本木雅弘、 田村安奈／小泉今日子、 スイケン／中井貴一、 田村修三／石坂浩二、 清家／中村トオル、 牡丹／清水美沙

著名な画家の展覧会で  
贋作が発見される  
浮かび上がるのは消えた  
天才画家の存在

世界的な名声を誇る画家、田村修三の展覧会で、大事件が発生。展示作品の一つが贋作であることが判明したのだ。日に日に報道が過熱する中、北海道で全身に入れ墨の入った女性の遺体が発見された。

一見無関係な二つの事件を結ぶ人物として浮かび上がったのが、若き日に消息を絶った天才画家、津山竜次だった。かつては竜次の恋人、現在は修三の妻となった安奈は、万感の思いを秘めて北海道へと向かう…

舞台は多くの倉本作品に登場する北海道。特に二人が再会する小樽のシーンは圧巻。エキゾチックな運河を背景に、濃厚な人間ドラマが展開されます。



## About Them

「海の沈黙」の原作・脚本を手がけたのは、テレビドラマ「北の国から」で一世を風靡した倉本聰。この一作で富良野を一躍人気スポットにしましたね。今回改めて氏の経歴を調べたところ、移転の理由はNHKの番組を中途降板してマスコミの一齐攻撃を受け、仕事を干されていたからとのこと。富良野には開拓民になるつもりで入植したそうです。しかし、この地との出逢いが、まさに人生の第2ステージ。大自然と協奏するように「前略おふくろ様」「北の国から」と、心に残る名作を次々に我々に届けてくれました。当初はゼロから出発するつもりで、自らの創作姿勢として「人間を！（描け）」「やんちゃんに！」「ボルテージ（を高く）」と書き壁に張り付けていたそうです。〈注、カッコ内は筆者の補足〉そんなやんちゃんな大家は、東大美学出身。長年構想を温めてきた本作では、人間とは、そして美とは何かを追求したかったと語っています。



## About Something

コロナで阻止されたエジプトに、やっと思って行ってきました。まず、最初に驚いたのは、アブシンベルの街では、公共のゴミ捨て場の分別が、赤、緑、黄色・・・と、色別になっていること。「アー、これなら文字を確認しなくてもいいから便利だな」と感心したのです。しかし、しばらくして気がつきました。ある場所では赤がボトルで緑がプラスチックだったのに、その100メートル先では、逆の色使いだったりするのです。これでは何のための色分けか。人類文明の基礎を築いた人々の末裔は、細かいルールは気にせずのんびりと暮らしているのでしょうか？今回のツアーの”売り”のひとつが、ダムから救い出されたことで有名なアブシンベル神殿が特別入場だったこと。一行13名と現地ガイドで内部を独占。壁画の一つ一つを、細部までじっくり見ることができました。或る参加者の「でもここに夜一人で取り残されたら嫌だな」との発言に全員が納得の表情・・・と思ったら、同行していた我が娘が「あら、私は寝袋に入って一晩明かしたい」とポツリとひと言。彼女はその独特の感性で、特折、私を面白がらせてくれます。

エジプトを舞台にした映画はたくさんありますが、まず頭に浮かぶのはリバークルーズ中に連続殺人が起こるアガサ・クリスティの『ナイル殺人事件』（監督主演/ケネス・ブラナー）。その中には、アブシンベル神殿の上から石を落とす殺人未遂事件やピラミッドの上で凧揚げをするシーンが出てきます。100年前はこれらの偉大な遺跡にも、一般人が自由に登ることができたのだなと感慨無量。そういえば『ムソリーニとお茶を』（監督/フランコ・ゼフィレリ）という映画では、ウフィツィ美術館の中に道具を持ち込み、ティータイムを楽しむことを日課にしているご婦人たちが登場してビックリ!!したこともありました。遺跡や文化財の保護はもちろん大切ですが、そういう時代をうらやむ気持ちも無きにしも非ずなどといったら、罰が当たりますね。地球を半周しエジプト7000年の遺産を10日間で堪能できたのは、高密度な現代システムと、両国の平和の賜り物。唯々ありがたく思います。

旅の最後に驚いたのが、1ヶ月半前からメインギャラリーがオープンした大エジプト博物館。その正面入り口に、何と、日本語で「大エジプト博物館」と大きく記されていたことです。ガイドさんの説明によれば、館の建設費を日本が極めて低利で貸してくれたことへの感謝の気持ちだそうです。日本政府もたまには賢いお金の使い方もするのだと、ちょっといい気分が最終日を締めくくることができました。